

〔資料〕

結婚カウンセリングの一事例

野々山 久 也

受付面接（8月26日） 妻ひとり来談（K会館において）

T氏によって受付けられる。T氏から電話にてノノヤマ（筆者）がカウンセリングの担当依頼を受ける。受付けのときは、妻が家庭裁判所からここに回されてくる。離婚についての相談をしに裁判所に行ったが、相談室のほうを紹介されたとのことであった。主訴は、「別居中であるが、夫が、離婚を口にする理由が納得できない。べつに他に女性がいるわけでもなさそう」ということであった。現在、夫婦ともに別べつの中学校の教師をしている。離婚ケースなので、ノノヤマにやってほしいということであった。次回は、夫ひとりを行かせるので、面接してやってほしいとのことであった。以上がインタビューの内容である。現時点での家族構成は、以下のとおりである。

〔夫〕 A 中学校体育教師（28歳）

〔妻〕 B 中学校英語教師（28歳）

〔子〕 長男（満1歳10か月）

〔結婚〕 一昨年前の4月吉日

〔別居〕 本年3月より現在に至る。

第1回面接（9月2日） 夫ひとり来談（K会館において）

妻に言われてきたが、来談したのは離婚になる際に、自分が不利にならないように（言われたとおり、カウンセリングも受けたぞ、といえるように）

するために来たという。自分の心はもう決まっていた離婚以外にないという。いままでの経過について聞いてみた。一昨年結婚。それまで自分にはH市（出身地）のほうに高校以来つき合っていた女性の友人がいた。しかしそれとは別に、同じ中学校の教師として彼女と仕事をしていて。カゼのときなどは下宿にきて世話をしてくれていて「いい人だ」と思っていた。そのうちにH市の女性が結婚をしてしまった。一方、彼女（妻）とは深いつき合いはして来なかったが、教師の後輩から、彼女をつれだしたり、適当に彼女と遊んだりしているという自慢話を聞かされたりしているうちに、彼女をこんな男に渡してはならないという気になってきた。先輩の先生から彼女が「本当は君を愛しているのだと打ち明けられた」という話を聞かされ、また「有能な女性だ」などと聞かされて、彼女を意識するようになった。ある日、彼女が自分の下宿へきた。いろいろ話をされていて、夕方、暗くなった。「女ひとりで男の部屋に遅くまでいるのはよくない。男はいつでもオオカミになるのだ」といったが、彼女はそれでも良いといった。その日、関係してから、自分は完全に彼女のとりこになってしまった。でも学校では、誰にも知られないように振るまった。自分たちにとって最初の卒業生が受験するというので、そのあとで結婚しようと話しあった。学校の先輩の先生夫婦に仲人になってもらって結婚した。結婚のときから、自分は友人づき合いが広いということ、マイホーム主義の教師になりたくなく「放課後も日曜日も学校に出て体育やクラブ指導をつづける」ということなどを理解させた。「授業後、さっさと帰る教師もいるが、まったく魅力のない男だと思うし、自分は決してあのような教師にはなるまいと考えている」という。子供が早く生まれた。妻はたいへんだったかもしれないが、その時でも友人が自分の家に遊びに来たりした。妻は友人の居るところで「ウチはバーじゃないし、私はホステスではない」などと平気で口にしたりした。私にも悪いところがあったことは認めないわけではないが、妻の態度は、私には我慢ならなかった。二人の関係は、次からつぎへと毎日毎日、破壊されていった。もう少し我慢をと思っても、

次からつきへと否定され、それが積み重なった。もう耐えられなくなった。別居離婚を口にするようになった。H市の父母も来阪してくれた。仲人にも相談にのってもらった。しかし妻は私が悪いという責め方しかない。私はそこではそれなりに反省もしたが、だからといって、この女とは、もうやり直す気にはなれなかった。今年3月より妻が実家（Y市）に戻るかたちで別居することになった。子供は、そこで祖母がみているらしい。

妻は、他人に「夫を愛している。もとに戻れたら」などと都合のよいことをいっているようだが、あまりにも調子がよすぎると思う。ときに家のほうに子供の夏服などを取りにくる（タンスが家にあるから）が、部屋がよごれていようが、自分(私)のシャツがよごれていようが、流しの茶わんがよごれていようが、手をつけようともせず、服だけをだまってもって出てゆく。口ばかりで本当に愛しているとは思えない。態度は、ぜんぜん変わっていない。このあいだも忘年会には「他の男の先生に誘われてホテルまでいった」（セックスはなかったらしい）などと平気でいったりする。「先生（ノノヤマ）が自分たちの関係を分析したり、自分の感情を分析してくれることで反省はするが、また妻だけのせいでないことは分かるが、だからといって元に戻るという気にはなれません。心は決まっております」という。夫婦関係のもつれは、一方が悪くて一方が良いということではなく、二人の関わりのある方に問題のあること、二人にそれぞれ原因があること、共働き夫婦の場合には、夫の協力なくして家庭はうまくいかないことなど、説明したことについては一応理解したようだが、妻との積み重ねてきた悪夢は消えないらしく、離婚の決意をつよく表現した。次回は、できれば二人そろって来てほしい。とにかく奥さんには来てほしいと伝える。そしてカウンセラーは、たとえ二人が別れるにしても奥さんの感情的整理のないまま別れることは、子供を育てていくのに子供にマイナスの影響を与えないとも限らないので、理解し、納得して別れられるように手助けしたいし、もちろん二人が元に戻って再出発できれば、それにこしたことはないのです、とにかく今のままの状態から少しで

も進展することのために助力したいと伝える。「私はカウンセリングなど受ける意思はないので、もう決してここには来ません」といい、妻については本人の自由で、自分は知らないといって帰る。

第2回面接（9月16日） 妻ひとり来談（K会館において）

「夫と一緒にといっても、夫は行く必要なしと受けあってくれなかった」という。カウンセラーとしては、それも止むを得ないと思うと同時に、今日は二人でない方がよかったとも思った。つまり妻から個人的情報を得たり、妻への一定の働きかけが、まず必要であることに気づいたからである。

まず現在は別べつの中学校で教えているということから話しをはじめ。妻は、もっぱら夫が勝手すぎるとか、家庭を省みてくれないとかをくり返して述べる。妻は「夫が私の性格がいやになったというだけで離婚をいうのは納得できない。自分は元に戻りたいと思う」という。引越しのとき、母が手伝いに来ていたが、夫が友人をつれてきた。それはベビー・サークルを組み立てるための手伝いだったが、前から頼んでいたのに、まだやってなかったのかと思い、友人に対しても、つっけんどんな態度をとった。夫は友人が帰ってしまうのではないかといて怒ったが、むしろ早く帰ってほしかった。友人はすぐに帰った。自分の態度に気づかせようと、カウンセラーがしだいに話しを「確認」と「明確化」に向けていくうちに、自分の言葉づかいや夫に対する態度に冷淡さがあったことに気づいたようで、涙ぐみはじめた。たしかに自分にも問題があった。でも、だからといって今後はどうしたらよいのか分からないという。すぐには答えは出ないと思うので、もう少し時間をかけて考えてみようとして話して、次回の日程を約束する。事情が微妙なので、あまり日数をあけたくないが、次回は相談室の例会のため、次のつぎの土曜日には面接するように約束した。しかし次のつぎの土曜日は、K会館が利用できないため大学の研究室のほうで会うことにした。夫婦ふたりの合同面接を試みてみようと考えて、ぜひ二人で来談するように促しておく。

第3回面接(9月30日) 妻ひとり来談ののち夫も来談(大学研究室において)

午後1時に約束したとおり、妻がひとりで現われた。夫は「行く必要なし」といって受けつけてくれなかったという。夫は離婚の心をきめているので元に戻すためのカウンセリングは必要ないといっていたという。夫婦の問題を話すと、うまくいかないが、よその人のことを「元気だとか病気だとか」話すときは、わりとスムーズに話しができるという。

30分後にドアをたたく音がして、夫が車で来談した。カウンセラーが喜びを表明しながら迎え入れた。妻には別に表情の変化はうかがえなかった。「もうお越しにならないのかと思っていたのに、よかった」といったら、「別に来ることはないが、自分が来ることで妻が離婚のための心の整理ができるのなら、協力すべきだと思ったからだ」という。今の状態には早く決着をつけたいと思っているという。「妻は、ときに別れたいというし、戻りたいともいうし、どうしようといっているのかはっきりしないので……。」そこで「それではカウンセラー(ノノヤマ)は、お二人と順番に話しをしたいと思いますので、その間は、一方は黙って聞いていて下さい。話しがしたければカウンセラーに話して下さい。二人で話し合う必要はありません」といって夫のほうから面接を開始する。前の面接で、夫が家庭を省みない独自の生き方に問題があることに自分自身気づいたこと(反省したこと)を思い出させ、かつ横にいる妻に聞かせるために、その辺の話しから始めた。つまり、具体的な過去の場面を夫に話させようとした。しかし反省的な発言はしても、すぐに一回だけの問題ではなく、積み重ねがあるので、反省の心もあるにはあるが、今ではもう一緒にやっていく気はわからないと、むしろ反論的な意思表示を付け加える。

つぎに、妻に引越しのときの状況がどうであったかを思い出して話してみるように促す。妻は、前回とちがって自分が冷淡なことばであしらったことについての反省はせずに、自分たちが落ちついたかったこと、そして夫の非

協力的な態度についての批判をカウンセラーに述べるだけであった。カウンセラーは、いくらか指示的にそのときの夫の感情はどういう風になっていたか考えてみると促す。それにつれて、いくらか冷淡なことばづかいであったこととか、自分の自己中心的性格などについて、ある程度述べた。

夫は妻の心が大きく変化していないことを読みとって、たしかにことばのうえで変わったように見えても、それが本当の心からの変化とは考えられないという。そこでカウンセラーは、二人に対して、どちらかが悪いから、こうなったのではなく、両者の関係の問題であること、相手を変えるには自分が変わらねばならないことを説明する。夫に対して、ある共働き夫婦の事例をあげて、夫の協力（たとえば保育所に子供をつれていったり、迎えに行ったり、買物に協力したりすること）は不可欠であることを話すと、自分も否定しないという。ただ時間的に無理なところは無理だという。妻に共働きをやめたら、生活はできないのかと尋ねてみると「以前はできなかったが、今ならできる。だが生活レベルをかなり落すことになるので、夫の協力なしには出来ない」という。また他の女性の教師たちが共働きをやっているのだから、自分にもできるはずだし、「やっていきたい」という。夫にライフ・サイクルの変化で、しばらく「マイ・ホーム主義」をやれば、子供も大きくなる。そうすれば自由になれるという話を説明しておく。

カウンセラーは、なお妻との話しをつづける。「夫の心がかかわらなければ、どうにもならない」というが、今のままでは決して変わることはないと信ずると話してみる。そこで「あなたは夫の心がかわってほしいことを要求しているだけで、どうしようもないと思わないか。それで元に戻したいというのは矛盾しないか」などと指摘してみると、いくらか気づいた様子で「自分が変わらなければならないんですね」といい、「自分は変わるために努力したい」といいだす。そして「その方法が分からない」というので、感情のままに言葉を出すのではなく、一回ストップをかけて、相手に本当に理解させ、生徒に教える方法の原理と同じようにすべきだと話すと、「そうですね」といいな

がら涙ぐむ。さらに言葉の問題だけでなく、行動や態度でそれを表現しなければならないとも説明しておく。そして、故意にカウンセラー（ノノヤマ）がうつむきながら手にしていたボールペンのキャップをはずしたり、はめたりしながらして、いくぶん長い時間の空白（沈黙）をつくってみた。すると、妻の鼻水をすする音（泣いたため）だけが、とりわけ目立つ結果となった。夫が「強迫的に」話していいですかと発言をもとめてきた。「このままだと他人が聞けば、『ここまで女が変わってきているのに、男は受け入れないなんて』といって、男らしさのない男と非難するかもしれませんが……」といって、明らかに防衛的反応を示しながら、「でも、自分はことばだけでは信用できない。いままでの積み重ねは消えません」と主張した。カウンセラーは、一瞬、ここでこの夫の感情を「拒否」するか、「受容」するか迷ったが、思いきって「受容」することにした。「よく分かりますよ。私もことばだけでは信用しませんね。」そして付け加えて、妻が自分自身の変化を表現するチャンスも、とうぜん必要であることを説明しておく。

妻に対して「夫を変えるには、あなた自身が変わることですよ。それも態度や行動で示す必要があります。それでも相手が変わらなければ、あなたは別の道を探していくほうがよいかもしれませんね」と、夫に聞えることを前提に付け加えておく。

ちょうど、このとき大学の事務員から電話の連絡があって、あえて二人を部屋に残して電話の用事に出る（用事が済んだのちも時間をしばらくおいてみる）。そして15分位して部屋に戻ってみたが、二人は期待したように話しあっている様子は、まったくうかがえなかった。時間も長くなったので打ち切ることにした。夫には「これから続けてお越しにならなくても結構ですが、私が来てほしいと協力を要請したら来て下さいね」といっておく。夫は、これには返事をせずに、どちらかといえば無視の態度をとりながら、一言いいたいといって「カウンセリングをしていただくのは良いが、元に戻すためだけでなく、離婚のほうを考えてやってほしい」という。カウンセラー

は「そのとおりです。私は、どちらかにしようと思ってやっていません。それを決めるのは、お二人です。ただ、ご主人と奥さんが、そして子供さんがほんとうに幸せになれる方向をお選びになれるように、できたらお手伝いしたいと思っていますだけです。それから大事なことです、奥さんに対しては私は今までとは変化していくようにカウンセリングします。そして奥さんが変わっていても、ご主人が変わらないようでしたら、私は離婚ということも素直に考えるだろうと思います。だから両方を考えますが、それには順番があることも理解しておいてほしいと思います」というと、夫は独りごとのようにボソボソと「僕が変わらなければ、この人も変らないということですね」という。「そうですね」と、カウンセラーはいっておく。礼をして一人で先に部屋を出ていった。

妻と二人になって、カウンセラーは「ご主人は、いい人ですね。来てくれないかと思っていたのに、よく来てくれましたね」という。妻は、笑えむ。そして「私の考え方を改めることが先決ですね」という。そこで共働きの大変さのこと、日本の男性のエゴイズム、そしてそのように男性を育てる母親についてなど、いろいろ話しをする。そうすると「私の考えの全面否定ですね」という。そうではなく、日本の男性の変革をやるだけのエネルギーがあなたにあれば別だが、いまは現状を見さだめて現状とうまくバランスをとることが大切だと思うと話して、次回の約束をして終りにした。離婚ケースでの「合同面接」は、ときに二人の対立抗争を激化させる危険性があるので、慎重であらねばならないが、今回は事もなく、まずまずの面接だったように思われた。

第4回面接（10月14日） 妻のみ来談（大学研究室において）

9月30日の面接以後、10月7日（第1土曜日）が中学校の体育大会ということで面接ができない。次のつぎの週では日があきすぎになるので、次週に面接することにした。しかし第2土曜日は、K会館が使用できないので、また

大学の研究室のほうに来てもらった。

先週の面接から前の一週間のあいだに2回ほど夫に会った。食事など作ったりした。食べてくれないかと思ったが、少しは食べてくれた。でも「あわれみでやっているのか」と、ふてくされたようにいわれた。まだ、ぜんぜんしっくり行っていない。高校の教師の資格をとるために試験があるので(10月5日)「もう来てくれるな」といわれた、という。そこでカウンセラーは、信頼関係という大前提がないままの感情のむき出しの表出は、関係がこわれるということ、親子や兄弟関係のように血のつながりなどがある場合は別だが、夫婦関係はほんらい信頼関係のみが大前提なのだ、ということを説明する。そして二人の場合は、その大前提がまだ完全ではない状態のなかで感情のむき出しの表出があったと思われると説明したら、「それについては十分わかる。でも、子供が小さくて仕方がなかった」という。夫にも協力してもらいたかったので、ついそうなったと思うという。ご主人のほうにも問題はなかったとはいわないが、日本の現代の男性としては普通といってもよい人だということ、奥さんのほうの共働きの女性としての不満も分かるがそれをぶちまけるまえに、まず二人が感情的に理解しあえることが大切であるので、男性の気持ちを変えるために、奥さんが全面的に変わる必要があると思うと説明しておく。しばらく沈黙がつづく。間をおいたのち、妻は「主人は、私が変わったら、そのあと、あるいはそれと同時に自分が変わらなければ自分が悪者にされるということをどうも気にしているようです」という。別に返事はしなかった。

また、しばらく沈黙がつづいた。そののち妻は「具体的にどうやってよいのか分からない」という。急いで点数かせぎに出てはいけないということ、効果をあせった行動は逆効果だということを説明する。基礎がためが大切で、たとえば金の余裕があるのなら貯金をしておく。ご主人の名義にしておくのは大事なことだ。留守に出かけていって部屋のそうじや、せんたくをしておく。そして黙って帰る。これらは普通の妻ならば、だれでもやっていること

だ。それは愛しているから出来ることだ。そこで損得や女性が不利だという考えを持っていて、しかも私は愛しています、といえ、それはまったくのウソになるだろう、と説明しておく。これはまた、よりを戻すための行動ではないということも自覚する必要があること。そしてまた妻の愛する夫への役割行動であるということ。ご主人がどんな反応をするか不明だが、どんな反応をされても否定すべきでない。まさにそれが主人の気持ちだと思って認めることが大切だ。などなど話しておく。

自宅で主人に会ったとき、主人は恋人がいるとい、夕方、出かけたりしたという。しかし本当に女性がいるかどうかは不明だとい。でも以前、愛し合っていた女性がいて、ときどきその女性の名前を呼んだりして当てつけたこともあったとい。部屋の花びんに花が入れてあった。聞いたら恋人がくれたといったりしたが、それも不明だとい。「負けずに奥さんもしてあげたら、どうですか」と妻にい、もしそれをご主人が気づいても、それを恋人のせいにしてあげれば良いと説明しておく。夫との接触は、いつもユーモアと茶目気で、夫に直接的対応をして、基礎がためのほうは理性的または冷静的でなくてはいけないことを注意しておく。とにかく時間的余裕をもってあせらずに頑張るように励ます。「何かつかめたような気がします。頑張ってみます」とい、面接の終りのほうでカウンセラー自身、主人（夫）の孤立感をふせぐ必要を感じたので「また、ぜひご主人にも会いたいの、ノノヤマのほうに都合のよい日時を連絡してほしいとい、と」を伝えてくれるように依頼しておく。

第5回面接（11月4日） 妻ひとり来談（K会館において）

前の相談ケースが少し長びいたので、15分ほど約束時間よりも待たせた。三週間ぶりだが、いかがと尋ねると、それほど夫と会うチャンスがなかったという。また、家に行っては洗たくや掃除をしたりしているが、逆効果みたいだとい。夫は気持ちが悪いといっているという。「カウンセリングを受

けに行っているが、心の整理のためというよりも、あくまでも元に戻すためのカウンセリングになっているのではないか」と、夫はいつているという。どうも裁判所にでかけて行って相談をしてきたように思われるという。裁判所では「協議してみて協議離婚にならないとき、調停をやるので、その段階まで進んでこなければならない」といわれたようだという。夫は裁判所に出頭する日がくるので、その日を待つようにと妻にいつている様子。でも裁判所には、その申請はやっていないようでもある。カウンセラーとしては夫の心の状態に孤立感と不信感が高まっているように感じたので、以前にも話したように、ぜひ一度、ご主人に会いたいので都合のよい日時を電話するように伝えてほしいと強くいつておく。

また先日、来年度の扶養家族の申請を出すのだが、子供を妻のほうの扶養家族に切換えたいといわれたという。だが妻として黙ってとり合わないようにしたという。カウンセラーからは、まず妻が点数かせぎとしてのみ、せんとくやそうじをするのでは真の解決に向かわないことを繰り返し伝える。このことは前からいつてきたので自覚している様子。しかし顔の動きとしては「妻ほんらいの役割としてやらなければいけないのですね」と、自分なりにいい直している様子であった。そして「このことは今ではよく分かっているつもりです」という。そこでカウンセラーは、夫が「気持ちが悪い」といつているということの意味がはっきりしないが、しかし何らかの影響はあると思うと、自信をつけるように促しておく。妻がほんらい愛の気持ちだけで妻の役割が素直に果たせるようになったのに、夫がそれでも拒否し、離婚を主張するならば、それはやはり冷静に相談にのり、正しい方向を選ばざるを得ないことになると思うと、以前からのカウンセラーの判断を再度話しておく。そして夫と妻の関係だけでなく、次回からは妻自身の性格や男性に対して、または夫というものに対して、あなたがいだいて感情について話しあい、あなた自身の自己洞察を高めることをしていきたいといいつて、本日は終える。本日は40分位の面接で終った。次回は、11月18日（土）に設定し

てみた。

第6回面接（11月18日） 妻ひとり来談（K会館において）

今日は何だかお化粧も丁寧にしたようで、ふっくらとした面持ちで、いつもよりも表情が明るく感じられる。前回に約束したように「今日は、ご主人との関係というよりも奥さんの心の問題というか、性格の問題または男性にいただいている感情について話しあってみましょう」というと、妻はすぐに自分が大学生のころ父親と喧嘩ばかりして、口ごたえをしていたと話しはじめた。彼とデートしはじめた時でも遅く帰ったりすると、すぐくうるさくいわれていやだった。でも、まったく主体的に自分の行動をとったという。結婚したとき、これで自由になれたと思ったという。「父は男の『意地』というか『小心者』というか、たしかに私のしつけを考えてやってくれていたことは分かるが、ただすぐどなったり、怒ったりするだけだった。小学校のころは叔母さんに『ただ黙ってなさい』といわれたこともあって、ただ黙って無言の抵抗だけしていた。叔母さんが返答せずに（口ごたえせずに）黙っていたほうがよいといってくれていたところから考えると、叔母は父の性格をよく知っていたのだと思う」という。母は、私には「あなたが悪いのだから、お父さんの言うことを聞きなさい」といっていたが、父に対しては子供が怖がっているから、もっと優しくいふべきだなどといっていたという。父は私をただ自分のものというか、所有物くらいに思っていたのだと思う。今でもそうで、夫の悪口を強くいっているという。私は「夫」をかばうのだが、父は「なってない」といって批判するという。弟は、私と父の関係を見て、うまく振舞っていた。だから、あまり叱られてはいかなかったようだ。姉弟喧嘩は、絶えなかった。今は、仲よく話しあっている。父は長男で、祖父と同じ会社に勤めたが、祖父の定年後は姉や弟を経済的に面倒をみてきたらしい。祖母は早く死んだようだ。父は経済的に禁欲なほうで、節約第一主義の人間で、今でもそうである。主人の家族と私の家族がはじめて出会うことになっ

た日でさえ、母がよそ行きの上等の服を出してあったのに普段着できていた。中学のときくらいから口ごたえをしたりしていたと思う。中学のときは、みんなが「あの子好き」とか、いろいろいっていたが、そんな話しには深入りせずに勉強ばかりしていたと思う。

表面的な話しばかりで、なかなか深い話しに入りそうにないことにカウンセラーは、いくらか歯がゆい感じがしていた。そこで「家で何か気づいたら、それをノートにしてみるようにしたらどうですか」と勧めて、話しを一応そこでやめにして、「このごろのご主人はどうですか」と尋ねてみた。前回の面接のあと、11月9日に少し夕方おそく夫の家のほうに出かけてみたという。夫からまたカウンセリングでは、どんな話しをしているのかと尋ねられたという。すなおに話したら、「ノノヤマさんは、いい人やな」とか「一緒に飲みたいな」とかいていたという。「あれから先生のほうに電話がありませんでしたか」という（別に電話など受けていない）。でも、夫はやはりカウンセリングは受ける意思はないといっているという。そこで「大学でお二人とお会いしたとき申しあげたように思いますが、私はご主人をカウンセリングの直接の対象とは考えていませんので、カウンセリングをする気はありません」ということを伝えてほしいということ、そして「たぶん奥さんのここでの話しの進展ぐあいが気になっておられると思いますので、説明だけでもしたいと思っているということを伝えてほしい」と説明しておく。ほんの少しのあいだ黙っていたが、妻がその日のことをそのあと詳しく話した。その日は、夫のほうから夜、「泊まって行け」といったという。そこで夜、いろいろと話し合ったという。たとえば、もう6か月も別べつに住んでいるので自分には女がいるとか、いい女性がいて再婚するようになったら子供は引きとりたいとか、など。でも女はひとりではなく複数のようにいっていたという。また「あんた」には男がいるのかと尋ねられたという。「ギャンブルで金がいるから金がたまっているなら持ってきてくれ」といわれたという。そこで「通帳の名義は、どうしましたか」と妻に尋ねると、夫の名義にして

あるという。また、そのほかには土曜日に妻の中学校でバレーボールの試合があるという話しをしたという。妻は別の研究会があるので昼から学校に居ないといったら、夫も試合には付添わないといていたという。でも都合で研究会に出なかったので運動場に行ってみたら、夫も来ていて他の先生がたにあいさつしてのち話しをかわしたという。

11月16日が夫の誕生日なので、日曜日にケーキをつくり、早かったが月曜日（13日）に夫のところにもっていった。夫はいなかった。ケーキと横に子供の写真も一枚おいておいた。その日（13日）の夜、1時半ごろ電話がかかってきたので受話器をとったが何もいわないので夫だと思って、夫の名前を「カズヒコさん」といってみたら、電話が切れてしまった。だから夫のところに電話をしてみて「今の電話は、あなたから」と尋ねたが、「それは知らない」といわれた。でも30分間ほど話しをした。別にこれといった話ではなく、とりとめのない話しをした。でも今までは作ったものはほとんど手をつけてくれなかったが、ケーキはおいしく食べてくれたようで、うれしかったという。「これでご主人は、やはり誠心誠意の通じる人で、きっと心からの愛情には必ず応えてくれる人だということがわかりますね」といって「支持」「共感」するように応じてみた。妻が今日は、いつもより明るい雰囲気である理由がここで理解できた。「でも、まだ楽観できませんね。これからも誠心誠意で」といって、今日の面接を終える。

次回は、カウンセラーの都合もあり、またしばらく様子を見るという点からも、日数をあけてみることにして、四週間後の12月16日に設定してみた。

第7回面接（12月16日）妻ひとり来談（K会館において）

自分の性格について、とくに父親との過去のかかわり方をおしてみた自分の性格について、前回少し話しておいた文章化について、やってみたかと尋ねてみたが、それはしていないという。でも、どんな風に反応したかは考えてみたという。やはり、いつも相手のいうことは無視して、そのときは黙

っていても、結果的には自分の好きなようにやってしまったという。こうした反応の仕方は、どんな時にも現われており、仕事の時も、友人との関係でも、またとうぜん夫との関係においても見られると思うという。「たとえば」と尋ねると、「やはりエゴイズムだと思います」という。とにかく自分の意思どおりに最終的にはとおしてしまふのだという。夫は、このことに不満をもったと思うという。たしか最初は、子供を喜んで風呂に入れたりしてくれていた。また食事の手伝いもやってくれていた。でも、いつかしら「外国へ行きたい」とか「一人で暮したい」などというようになった。私は、彼のやる事がどうも気にいらなかった。どこかから子供の育て方について聞いてきて、「こんな風にやれば」などといったが、私は無視して自分のやり方でやった（私にその自信があったというわけではないが）。彼は、いろいろやりたかった。子供にもいろいろやって（さわって）みたかったのかもしれませんが、わたしはやらせなかった。あるいは、やってもらおうとしなかった。彼は、それが不満だったかもしれない。それで「奥さんは、行動の面ではご主人に何もさせないようにした。でも口から出る言葉としては、ご主人への不満として『何も手伝ってくれない』ということだったのですね」と確認するようにいつてみた。妻は、このことばにはじめて自分の犯した矛盾に気づいたらしく、「私は主人に対して、どうしてそんな風になってしまった（やってしまった）のでしょうか」といって顔を赤らめた。「お宅のご主人は、大人であるわけですが、もし彼が子供であるとすれば、そんな状態におかれたとすれば、どんな風になると思いますか」と尋ねてみた。「非行に走るのでしょうか」という。「いや、もっと幼い子供であれば、どうでしょう」と尋ねてみた。答えられない様子。そこで間をおいてから「自閉症的な状態ではないのでしょうか」と話すと、「なるほど」とうなづく。「逃げ道を知らない子供は、自閉的になるでしょう。でも、ご主人のような大人は、逃げ道を探すはずです。どんな逃げ道を探すのでしょうか」と、答えを期待していつてみた。「やはり離婚ですね。外国へ行きたいとか、一人になりたいなどと言いだし

た時がその徴候のはじまりだったんですね」という。「どうしたらいいのか」といって考えこんでしまう。時間をおいて「どうしたらいいでしょうね。どうしてそんな風になったのか、その理由があなたの姿勢というか、態度にあるとすれば、その辺を考えてみないといけないでしょうね」といっておく。そして「いままでは、それなのに夫が悪いといって一方的にご主人だけを責めてきたのですね」というと、また今にも泣きだしそうになり、深刻に考えこんでいる様子であった。

「ところで」といって話しを、いまの夫婦関係にかえてみた。「このごろご主人はどうですか」と尋ねてみた。「このごろまた冷たい様子です。ほとんど食事をつくっても食べてくれません。カウンセリングに行くというと、『お前が大きらいだ』といっておいてくれといたりした」という。また「勝手にマンションに来るな。来るときは連絡しろ」といったという。このごろは電話で連絡してから行っているという。そのせいか、行くと必ず夫に会えるようになった。あとから帰宅するとか、途中から出て行くこともある。「必ず会えるのは、いい事なので、連絡することはいい事だと思っている」という。このあいだは「もう帰れ」と口ぎたなく言われた。つい「帰るわよ」といってしまった。語りながら、そのいい方がキツかったことを誤魔化すかのように、再度いいなおして「帰りますわ」といったという。「相手の売りことばにすぐ乗ってしまう。それがあなたの『台本』あるいは『筋書き』になってしまっている。その台本あるいは筋書きを自分で演出すべきですね」といっておく。次回は、しばらく間をおいて、今日のカウンセリングの効果（いくらか挑発的なカウンセリングであったこと）を見る意味でも1月20日まで1か月をおいてみることにした。

第8回面接（1月20日） 妻ひとり来談（K会館において）

第2回目の面接（妻との初回の面接）のところに比べて、妻はフックラと肥えてきて、とても顔色もよくなっている。心の落ちつきもでて、平静を

とり戻してきている様子である。

先日、自分のほうから夫に「離婚してもよい」と、はじめて言ってみたという。でも、まだ何とかなるのではないかという気持ちが自分のほうにいくらかあるので、相手の出かたを気長に待ってみたいという。夫の態度は、ぜんぜん変わらず、どちらかといえば、ますます悪化しているのではないかという感じもするという。夫の精神的な状態や妻の変化（たとえば離婚してもよいという発言）などに対する夫の考えを知るために、こちらから日時を定めて（2月3日に設定）、夫の来室を促してくれるように妻に強く依頼しておく。来室してくれないかもしれないという懸念は、大きい。

第9回面接（2月3日） 夫の来談なし（大学研究室において）

待てども、夫はやはり現われない。

第10回面接（2月17日） 妻ひとり来談（大学研究において）

夫は、高校の教師の資格がとれて、4月より近くのM高校に転勤することになったという。夫は、それを機に生活を改めて、今のマンションも出払って、小さなマンションを購入したい様子だという。そこへ一人で移り住むつもりらしい。学校から資金を借りることを話しながらパンフレットを見て計画していたという。口では、すでに手付けも打ってあるともいうが、H市の父親からは反対されている様子だという。「私としては最終的にはH市の父のほうに話し合って力を貸してもらいたいとも考えている」という。

先日は、主人のところへ子供をつれて行った。主人は、子供には自分から話しかけるようなことはしない。私のほうから「パパに絵本を読んでもらいなさい」といって行かせる。「おじさん」といわせると、彼はいつている。帰りにY市のほうまで車で送ってもらった。それは子供が車に乗りたいたいというもので仕方なしに、そうってしまった。でも、家から歩いて5分くらいのところで降ろされてしまった。

マンション購入については、私は「そんなことせずにもう一度、一諸にやり直したら」といって見たが、主人は「離婚を認めたのだから、自分がこれからやろうとしていることには一切、口出しするな」といったという。話しをかえて、カウンセラーから「マンションのほうに出かけたとき、ご主人とはセックスはあるのですか」と聞いてみた。妻は、すなおに「ハイ」と答えた。夫は「お前は、こんなことをしているから俺が忘れられずに、いつも家のほうに来るのやろう。お前も好きやな」などといっているという。洗たくなどは自分でして、私にやらせないようにしている様子だという。こちらから出かけるという電話をすると、そのあと前日に自分でやっているみたいだという。しばらく沈黙がつづく。

「以前は、どうしてよいか分からず、カウンセリングの日が早くこないか、先生に電話しようかと思うくらい待ちどうしくてたまらなかった。でも、このごろは落ちつきました」という。「先生にいちいち相談せずに自分でやっていくほうが良いのかもしれないかもしれませんね」という。妻とのカウンセリングは、これでどうやら終結の段階におおむね近づいてきた様子である。次回も一か月余りのあいだをあけて3月31日に設定してみた。

第11回面接（3月31日） 妻ひとり来談（大学研究室において）

いままでは、いつもスーツとかワンピースなどを着て、どちらかというところと正装して来談していたが、今日は一転して軽装のジーンズ姿である。

夫は、M高校に4月から転勤することに決定したようだという。この機に一切をかたづけたいといっていたという。「私も、まだ彼の離婚したい理由が十分には理解できていないのですが、このままでは問題だと思っています」という。

「先日、夫に話してのち、ひとりでH市の父母のところに行って、いろいろ話しをしてきました。H市のほうからも父母が来てくれて、4人で話し合いました。でも主人には、もうとりつくしまがないという結果に終わりました。

父母は『ふたりの問題だから、ふたりで解決する以外にない』といって帰りました。夫は、もう親でも子でもないという考えになっているようです」という。また、もしいま離婚手続きをとるのに承諾をしなければ、あとから私が不利益を感じて離婚を申し出ても、そのときには絶対に離婚手続きには応じないからといって脅したりしたという。夫は、離婚後は再婚せずずっと独身でいるつもりで、それが自分の主義だともいっているという。もともとこの結婚は、衝動的にやってしまったのだともいっているという。

近ぢか、アパートに移るというので「荷物（タンスなど）はもって行ってほしい」といっているという。それらは一切、いらないから妻のほうに返すといっているという。購入したマンションの入居は7月なので、それまで仮のアパートに移るとのことらしい（一部屋くらいのところ）。妻の実家の父母は、ただ夫に対して怒っているだけなので、妻としては、なるべく話さないようにしているという。実家の父母は、私自身が、夫の本心が十分には分からないのだから、もっと何が何だか分からない感じだと思うという。でも、先日も子供をつれて行ったら、子供にボールをぶっつけたり、意図的に足をかけてころばしたり、ひどいことをして「お前が大きらいだ」と子供にいったりしたという。私が子供の扱いについていうと、なぐるやら蹴るやらしたりして不満を爆発させたりしはじめているし、子供もたいへん恐わっています、という。夫は、考えてみると、最初から主張も考えも少しも変わっておらず、私も夫の理由は不明だとしても、現実が事実として存在しているので、やはりここが判断のしどころなのではないかと考えるようになりました、という。「カウンセリングを受けてほんとうに良かったと思います」という。「最初は、ほんとうに途方にくれました。このごろは冷静に考えられるようになりました。たしかに私も悪い点があったと思っています。そして感情をコントロールして対応するように努めてきました。でも、やはり本質は変わりません。ノノヤマ先生には、ほんとうに感謝しております。でも、私は本質的に変わらないことが分かったいま、このまま続けてよいか、やは

り考えなければならないと思います」という。また「もう一人で判断していくことも出来るようになりました。離婚の手続きは、私が印鑑を押せば、それで成立だと思いますが、子供の養育などのことを考えると、やはり裁判所の調停をうけたほうが良いと思います。夫が応じてくれるかどうかは分かりませんがね」という。そして「また何かがあれば相談にのっていただけますか」という。「いつでも相談にのりますよ」と答えると、「そのときは電話しますので、よろしくお願いします」という。

きわめて冷静ではあるが、にこやかさを忘れずに以上のことをカウンセラーに語った。時間も長くなったので、終りにしたが、研究室から見える彼女の帰る姿は、なんとなく「哀れ」にも見えた。